目次

古文
第１講　共通テスト本試験 第３問……p1
第２講　共通テスト追試験 第３問……p12
漢文
第３講　共通テスト本試験 第４問……p23
共通テスト追試験 第４問……p33

第１講　共通テスト本試験　第３問

第３問

次の【文章Ⅰ】は、鎌倉時代の歴史を描いた『増鏡』の一節、【文章Ⅱ】は、後深草院に親しく仕える二条という女性が書いた『とはずがたり』の一節である。どちらの文章も、後深草院（本文では「院」）が異母妹である前斎宮（本文では「斎宮」）に恋慕する場面を描いたものであり、【文章Ⅰ】の内容は、【文章Ⅱ】の８行目以降を踏まえて書かれている。【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】を読んで、後の問い（問１～４）に答えよ。なお、設問の都合で本文の下に行数を付してある。（配点　50）

【文章Ⅰ】

院も我が御方にかへりて、うちやすませ給へれど、(ア)まどろまれ給はず。ありつる御面影、心にかかりておぼえ給ふぞいとわりなき。「さし(注1)はへて聞こえむも、人聞きよろしかるまじ。いかがはせむ」と思し乱る。御はらからといへど、年月よそにて生ひたち給へれば、うとうとしくならひ給へるままに、Aつつましき御思ひも薄くやありけむ、なほひたぶるにいぶせくてやみなむは、あかず口惜しと思す。けしからぬ御

メモ欄

本性（ほんじやう）なりや。

なにがし（注2）の大納言の女（むすめ）、御身近く召し使ふ人、かの斎宮（注3）にも、さるべきゆかりありて睦（むつ）ましく参りなるるを召し寄せて、

「なれなれしきまでは思ひ寄らず。ただ少しけ近き程にて、思ふ心の片端を聞こえむ。かく折よき事もいと難かるべし」

とBせちにまめだちてのたまへば、いかがたばかりけむ、夢うつつともなく近づき聞こえ給へれば、いと心憂しと思せど、あえかに消えまどひなどはし給はず。

【文章Ⅱ】

斎宮は二十に余り給ふ。(イ)ねびととのひたる御さま、神（注4）もなごりを慕ひ給ひけるもことわりに、花といはば、桜にたとへても、よそ目はいかがとあやまたれ、霞（注5）の袖を重ぬるひまもいかにせましと思ひぬべき御ありさまなれば、ましてくまなき（注6）御心の内は、いつしかいかなる御物思ひの種にかと、よそも御心苦しくぞおぼえさせ給ひし。

メモ欄

御物語ありて、神路(かみぢ)(注7)の山の御物語など、絶え絶え聞こえ給ひて、

「今宵はいたう更け侍(はべ)りぬ。のどかに、明日は嵐(注8)の山の禿(かぶろ)なる梢(こずゑ)ども御覧じて、御帰りあれ」

など申させ給ひて、我が御方へ入らせ給ひて、いつしか、

「いかがすべき、いかがすべき」

と仰せあり。思ひつることよと、をかしくてあれば、

「幼く(注9)より参りししるしに、このこと申しかなへたらむ、まめやかに心ざしありと思はむ」

など仰せありて、やがて御使(つかひ)に参る。ただ(ウ)<u>おほかたなるやうに</u>、「御対面うれしく。御旅寝すさまじくや」などにて、忍びつつ文あり。氷襲(こほりがさね)(注10)の薄様(うすやう)にや、

「知られじな今しも見つる面影のやがて心にかかりけりとは」

更けぬれば、御前なる人もみな寄り臥(ふ)したる。御主(ぬし)も小几帳(こぎちやう)(注11)引き寄せて、御殿籠(とのごも)りたるなりけり。近く参りて、事のやう奏すれば、御顔うち赤めて、いと物ものたま

メモ欄

はず、文も見るとしもなくて、うち置き給ひぬ。

「何とか申すべき」

と申せば、

「思ひ寄らぬ御言の葉は、何と申すべき方もなくて」

とばかりにて、また寝給ひぬるも心やましければ、帰り参りて、このよしを申す。

「ただ、寝たまふらむ所へ導け、導け」

と責めさせ給ふもむつかしければ、御供に参らむことはやすくこそ、しるべして参る。

甘（かん）（注12）の御衣（ぞ）などはことごとしければ、御大口（おほくち）（注13）ばかりにて、忍びつつ入らせ給ふ。

まづ先に参りて、御障子をやをら開けたれば、ありつるままにて御殿籠りたる。御前なる人も寝入りぬるにや、音する人もなく、小（ちひ）（注14）さらかに這（は）ひ入らせ給ひぬる後、いかなる御事どもかありけむ。

（注）１　さしはへて ―― わざわざ。

２　なにがしの大納言の女 ―― 二条を指す。二条は**【文章Ⅱ】**の作者である。

３　斎宮 ―― 伊勢神宮に奉仕する未婚の皇族女性。天皇の即位ごとに選ばれる。

メモ欄

4　神もなごりを慕ひ給ひける ―― 斎宮を退きながらも、帰京せずにしばらく伊勢にとどまっていたことを指す。
5　霞の袖を重ぬる ―― 顔を袖で隠すことを指す。美しい桜の花を霞が隠す様子にたとえる。
6　くまなき御心 ―― 院の好色な心のこと。
7　神路の山の御物語 ―― 伊勢神宮に奉仕していた頃の思い出話を指す。
8　嵐の山の禿なる梢ども ―― 嵐山（あらしやま）の落葉した木々の梢。
9　幼くより参りし ―― 二条が幼いときから院の側近くにいたことを指す。
10　氷襲の薄様 ――「氷襲」は表裏の配色で、表も裏も白。「薄様」は紙の種類。
11　小几帳 ―― 小さい几帳のこと。
12　甘の御衣 ―― 上皇の平服として着用する直衣（のうし）。
13　大口 ―― 束帯のときに表袴の下にはく裾口の広い下袴。
14　小さらかに ―― 体を縮めて小さくして。

メモ欄

問１　傍線部(ア)～(ウ)の解釈として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は　1　～　3　。

(ア)　まどろまれ給はず　1

① 酔いが回らずにいらっしゃる
② お眠りになることができない
③ ぼんやりなさっている場合ではない
④ お心が安まらずにいらっしゃる
⑤ 一息つこうともなさらない

(イ)　ねびととのひたる　2

① 将来が楽しみな
② 成熟した
③ 着飾った
④ 場に調和した
⑤ 年相応の

(ウ)　おほかたなるやうに　3

① 特別な感じで
② 落ち着き払って
③ ありふれた挨拶で
④ 親切心を装って
⑤ 大人らしい態度で

問２　傍線部Ａ「つつましき御思ひも薄くやありけむ、なほひたぶるにいぶせくてやみなむは、あかず口惜しと思す」の語句や表現に関する説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は［４］。

①「つつましき御思ひ」は、兄である院と久しぶりに対面して、気恥ずかしく思っている斎宮の気持ちを表している。

②「ありけむ」の「けむ」は過去推量の意味で、対面したときの斎宮の心中を院が想像していることを表している。

③「いぶせくて」は、院が斎宮への思いをとげることができずに、悶々（もんもん）とした気持ちを抱えていることを表している。

④「やみなむ」の「む」は意志の意味で、院が言い寄ってくるのをかわそうという斎宮の気持ちを表している。

⑤「あかず口惜し」は、不満で残念だという意味で、院が斎宮の態度を物足りなく思っていることを表している。

問３　傍線部Ｂ「せちにまめだちてのたまへば」とあるが、このときの院の言動についての説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は［５］。

① 二条と斎宮を親しくさせてでも、斎宮を手に入れようと企(たくら)んでいるところに、院の必死さが表れている。
② 恋心を手紙で伝えることをはばかる言葉に、斎宮の身分と立場を気遣う院の思慮深さが表れている。
③ 自分の気持ちを斎宮に伝えてほしいだけだという言葉に、斎宮に対する院の誠実さが表れている。
④ この機会を逃してはなるまいと、一気に事を進めようとしているところに、院の性急さが表れている。
⑤ 自分と親密な関係になることが斎宮の利益にもなるのだと力説するところに、院の傲慢さが表れている。

問4　次に示すのは、授業で**【文章Ⅰ】【文章Ⅱ】**を読んだ後の、話し合いの様子である。これを読み、後の(i)～(iii)の問いに答えよ。

教　師　いま二つの文章を読みましたが、**【文章Ⅰ】**の内容は、**【文章Ⅱ】**の8行目以降に該当していました。**【文章Ⅰ】**は**【文章Ⅱ】**を資料にして書かれていますが、かなり違う点もあって、それぞれに特徴がありますね。どのような違いがあるか、みんなで考えてみましょう。

生徒A　**【文章Ⅱ】**のほうが、**【文章Ⅰ】**より臨場感がある印象かなあ。

生徒B　確かに、院の様子なんかそうかも。**【文章Ⅱ】**では［X］。

生徒C　ほかに、二条のコメントが多いところも特徴的だよね。**【文章Ⅱ】**の［Y］。普段から院の側に仕えている人の目で見たことが書かれているっていう感じがあるよ。

生徒B　そう言われると、**【文章Ⅰ】**では**【文章Ⅱ】**の面白いところが全部消されてしまっている気がする。すっきりしてまとまっているけど物足りない。

教　師　確かにそう見えるかもしれませんが、**【文章Ⅰ】**がどのようにして書かれたものなのかも考える必要がありますね。**【文章Ⅰ】**は過去の人物や出来事などを後の時代の人が書いたものです。文学史では「歴史物語」と分類されていますね。**【文章Ⅱ】**のように当事者の視点から書いたものではないということに注意しましょう。

生徒B　そうか、書き手の意識の違いによってそれぞれの文章に違いが生じているわけだ。

生徒A　そうすると、**【文章Ⅰ】**で［Z］、とまとめられるかな。

生徒C　なるほど、あえてそういうふうに書き換えたのか。

教　師　こうして丁寧に読み比べると、面白い発見につながりますね。

(i) 空欄 **X** に入る最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 6 。

① いてもたってもいられない院の様子が、発言中で同じ言葉を繰り返しているあたりからじかに伝わってくる

② 斎宮に対する恋心と葛藤が院の中で次第に深まっていく様子が、二条との会話からありありと伝わってくる

③ 斎宮に執着する院の心の内が、斎宮の気持ちを繰り返し思いやっているところからはっきりと伝わってくる

④ 斎宮から期待通りの返事をもらった院の心躍る様子が、院の具体的な服装描写から生き生きと伝わってくる

(ii) 空欄 **Y** に入る最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 7 。

① 4行目「いつしかいかなる御物思ひの種にか」では、院の性格を知り尽くしている二条が、斎宮の容姿を見た院に、早くも好色の虫が起こり始めたであろうことを感づいている

② 10行目「思ひつることよと、をかしくてあれば」では、好色な院があの手この手で斎宮を口説こうとしているのに、世間離れした斎宮には全く通じていないことを面白がっている

③ 22行目「寝給ひぬるも心やましければ」では、院が強引な行動に出かねないことに対する注意を促すため、床についていた斎宮を起こしてしまったことに恐縮している

④ 24行目「責めさせ給ふもむつかしければ」では、逢瀬(おうせ)の手引きをすることに慣れているはずの二条でさえ、斎宮を院のもとに導く手立てが見つからずに困惑している

(iii) 空欄 Z に入る最も適当なものを、次の①〜④のうちから一つ選べ。解答番号は 8 。

① 院の斎宮への情熱的な様子を描きつつも、権威主義的で高圧的な一面を削っているのは、院を理想的な人物として印象づけて、朝廷の権威を保つように配慮しているからだろう

② 院と斎宮と二条の三者の関係性を明らかにすることで、複雑に絡み合った三人の恋心を整理しているのは、歴史的事実を知る人がわかりやすく描写しようとしているからだろう

③ 院が斎宮に送った、いつかは私になびくことになるという歌を省略したのは、神に仕えた相手との密通という事件性を弱めて、事実を抑制的に記述しようとしているからだろう

④ 院の発言を簡略化したり、二条の心情を省略したりする一方で、斎宮の心情に触れているのは、当事者全員を俯瞰(ふかん)する立場から出来事の経緯を叙述しようとしているからだろう

■ 共通テスト本試験

問題番号（配点）	設　問	解答番号	正　解	配　点
第 3 問（50）	1	1	2	5
		2	2	5
		3	3	5
	2	4	3	7
	3	5	4	7
	4	6	1	7
		7	1	7
		8	4	7